

「食料の安全保障と日本農業の活性化を考える」

＜本シンポジウム開催の背景＞

近年、世界の穀物市場では需給が逼迫してきたことを背景にして、穀物の国際価格が高騰してきております。これに伴い、様々な事情で主要な食料を輸入に依存せざるをえない購買力の乏しい貧困国では慢性的な食料不足が起こり、一部には社会暴動へと発展しています。一方、森林や水など世界的規模での自然資源の枯渇と荒廃は、環境の変化に適した新品種を作り出すために必要な作物遺伝資源の喪失を引き起こし、グローバル化が急速に進展しているなかで多国籍企業は、種子・肥料などの生産資材を囲い込んでいます。また先進国や新興経済成長国は開発途上国の農地を取得する競争に走っています。生存資源としての食料とそれを産み出す農業生産力の確保は、国家の安全保障上きわめて重要な課題となってきたといえます。

他方わが国では、慢性的なコメの供給過剰の基調から脱却できないまま、不足している小麦や大豆、飼料穀物を水田の高度利用によって増産する努力は続けられているものの、その成果は目に見える形で現れず、カロリーベースでみた食料自給率低迷の主要な要因となっています。畜産・園芸など経営の合理化や商業化が進んだ部門でも、輸入される飼料や生産資材などの価格高騰によって経営は破綻のリスクにさらされています。

＜本シンポジウム開催の趣旨＞

世界と日本がおかれているこうした環境の変化を念頭におきながら、日本農業をどのように活性化させ食料を安定的に確保するかは、きわめて重要な国家的課題といえるでしょう。

本シンポジウムは、わが国の食料安全保障の確保と農業の活性化を考える素材を広く世論に提供することを目的として、食と農に日々深く関わっておられる各方面の方々をお招きしてご報告をいただくとともに、それをもとにした活発な議論を展開しようとするものです。

<開催要項>

1. 日 時 : 平成 21 年 12 月 4 日 (金) 13 時 30 分～17 時
2. 会 場 : 丸ビルホール (千代田区丸の内 2-4-1 丸ビル 7 階 東京駅より徒歩 1 分)
3. テーマ : 「食料の安全保障と日本農業の活性化を考える」
4. 共 催 : 東京農業大学、毎日新聞社
5. 後 援 : 農林水産省、全国農業協同組合中央会、全国農業協同組合連合会、日本農学アカデミー、実践総合農学会、東京農業大学総研研究会
6. プログラム : (敬称略)

開会<13 時 30 分～13 時 45 分 スケジュール説明・出演者紹介>

河野 友宏 (東京農業大学教授)

一部 基調講演 (あいさつ) <13 時 45 分～14 時 15 分> 2 名

大澤 貫寿 (東京農業大学学長)

菊池 哲郎 (毎日新聞社常務取締役主筆)

二部 話題提供<14 時 15 分～15 時 15 分> 4 名

白石 好孝 (農業体験農園経営)

面川 義明 (稲作経営)

齋藤 文子 (パルシステム神奈川ゆめコープ理事長)

末松 広行 (農林水産省大臣官房政策課長)

< 休 憩 >

三部 パネルディスカッション<15 時 30 分～17 時>6 名

コーディネーター : 中村 靖彦 (東京農業大学客員教授)

パネリスト : 澤浦 彰治 ((株) 野菜くらぶ代表取締役社長)

大桃 美代子 (女優・農業実践者)

荒蒔 康一郎 (キリンホールディングス (株) 相談役)

高木 勇樹 (NPO 法人日本プロ農業総合支援機構副理事長)

板垣 啓四郎 (東京農業大学教授)

クロージングリマークス (総括と次回への繋ぎ)

三輪 睿太郎 (東京農業大学教授)